

めだか談義

メダカ発、世の中つれづれの記。2022・3・11



NHK で「新映像詩・里山」というシリーズが始まりました。第1回目は、新潟の豪雪地帯、十日町の星峠の棚田に焦点があてられました。魚沼産コシヒカリを耕作する棚田です。半年間、4メートルの豪雪に埋もれる田んぼですが、集落の冬の間の日課といえば、屋根の雪下ろし。稲のもみを燻した灰を田んぼの上の雪に散布して、太陽のチカラを借りて雪を融かす様子は、まるで墨の抽象画を見るような美しさでした。そして、その雪解け水が棚田を支えているのだそうです。ウツギの花の開花を合図に、田植えの季節がやってくると、雪解け水のため池からメダカたちが動き出します。栄養を求めて、いっせいに田んぼを目指すのです。水路から田んぼに入るには、滝登りのように10センチほどをジャンプしなければならないのですが、その必死の跳躍をカメラは見事にとらえていました。新潟ということは、このメダカはキタノメダカ。桑原のミナミメダカとは遺伝子を異にする種です。田んぼにたどりついたメダカたちは、イネの周囲に大量に発生する大好物のミジンコを食べます。食べるだけではなく、食べられもするのです。メダカはアキアカネのヤゴたちの餌食にもなることもある。鳥たちにも襲われたり、やれやれ、生態系はいろいろな連鎖を繰り返します。人びとの黙々とした営みに、生きものたちが寄り添うように暮らしていることがよく分かるドキュメンタリーでした。何より、メダカの生態を丁寧に追いかけてくれたのが嬉しい番組づくり。国際映像というクレジットも入っていたので海外でも紹介される番組なのでしょう、「SATOYAMA」の価値を海外にも発信、これからのシリーズに期待です。

美しい映像を楽しんだ後は、ウクライナ報道の嵐が押し寄せてきました。父親と引き裂かれて避難していく子どもの泣き声は耐えられません。ヒトラーやスターリンのような、核をもチラつかせるプーチンの暴挙には目をそむけるしかありません。

かつてベトナム戦争時に「花はどこへ行った」という反戦歌が世界中で歌われたことをご存じでしょうか。1960年代後半のことです。アメリカのフォークソングの祖と呼ばれるピート・シーガーによる詩と曲です。キングストン・トリオやピーター・ポール・マリーの代表曲ともなりました。日本でも多くのアーティストがカバーしました。

この歌のルーツがウクライナにあることを教えてくれたのは、深夜放送での森山良子のおしゃべり。そこで調べてみました。ピート・シーガーがヒントを得たのはショーロホフの小説「静かなるドン」のなかに紹介させる一篇の詩でした。この小説は、ウクライナから南ロシアに群雄割拠したコサックを描いていました。半農軍属の戦士が戦場にとられたときの恋人の嘆きの詩でした。ドン・コサックとか、ステンカラ・ジーンの乱とかいろいろな言葉を思い出すことになり、ウクライナ人にはコサックの「屈強」のDNAが受け継がれているので、簡単にはプーチンには屈しないのだろうと合点もいきました。日露戦争でも、日本軍はコサック部隊に苦勞させられたことも思い起こされました。

「歌のチカラ」と言えば、かつて「プラハの春」のときは、チェコにジョン・レノンの「イマジン」が街にあふれ、侵攻してくるソ連軍を押しとどめ、民主化が実現しました。また、バルト3国と呼ばれるエストニア、ラトビア、リトアニアは90年前後に、ソ連の侵攻に対し、「我々に戦車は無いが、歌という武器がある」と広場に集い、民族の歌や讃美歌を合唱し、ソ連からの独立を次々に成し遂げ、それは「歌う革命」と呼ばれました。

NY同時多発テロの際も、「イマジン」が街を包みました。もっともこの時は、平和への祈りというよりも、イスラムへの報復というカタチでアメリカをひとつに団結させる皮肉な結果をもたらしてしまったわけでもあるのですが。歌に屈するとはとても思えないプーチンですが、ウクライナから、世界から、いま「花はどこへ行った」の大合唱を響かせたいと。

メダカとウクライナ、頭が混乱しています。